

がそれは兎もあれ、モンベルトの所謂「福祉説」的理論が、そのやうな理論的難點にも拘らず、或はその抽象的一面性の故に却つて一層切實に、近代文化に對する一つの深刻な疑義を人口問題の上から提出した成績は没することができない。今日の人口問題は、とりわけ文明批評の問題として、いはゞ福祉説的理論の行き詰るところから、歴史と文化とに對する一層深い批評的意識を以て、更に新しく出發するところにあるともいへよう。我々は單に妊孕率の低下を生活福祉の増進といふ近代の觀念によつて説明するかはりに、寧ろそつといふ近代人に自明な先入觀念そのものを近代的人口現象の特性から反省し吟味せねばならぬ。と同時に妊孕率の低下といふ近代的人口現象の一特性も、單に個々人の心的性向の變化によつて之を理解する以上に、より歴史的、社會的な人口現象の一環として把握される必要があらうと思ふ。例へばモンベルトがその理論の統計的檢證を攪亂する反作用的因子の一例として注目した青壯年人口の都市集中の事實の如きも、寧ろ近代社會生活の構造的變質過程を導來せる最も近代的なる人口現象として、近代的出産減退の事實と不可分に結びついたものでなければならぬ。それは確かに「福祉説」的聯關の一義的な統計的表示を攪亂する一因子には相違ないが、然しそも／＼差別妊孕率の成立も、従つてまた妊孕率の一般的低下傾向も、實はこの人口の都市集中といふ近代的人口現象を根幹としてこそ初めて導來されたのだといふこともできると思ふ。人口の離村向都は人口收容力を劃期的に擴大させた近代社會と近代文明の歴史的功業の一徵表ではあるが、同時に又すべての生活様式や生活理想から自然さといふものを喪つてゆく近代人の生活の最も具象的な一象徴でもあるわけ、そつといふ明暗表裏した、勝れて近代的な歴史社會的傾向の中にこそ近代的出産減退傾向の真相を解明する鍵も潜んでをり、兼ねてまた新しい

當來社會の生活と文化とへの現實的諸條件も亦これを探索することができ
るのではないであらうか。(完)

モンベルトのマルサス批評

(埋め草)

マルサスが唯一の豫防的障害として取り上げた道徳的抑制は、専ら結婚生活に入る際の一層慎重な配慮を意味するに過ぎない。従つて福祉増進の結果がマルサスの立場ではどういふことになるかといふと、それは専ら輕率無慮な結婚を少なくさせ、ために婚姻年齢を上昇させ、婚姻数を減少させることとならう。そしてその結果として初めて出産数の減少を惹き起すことになる。

か様なマルサスの見解も原則的には正しい。我々は文化の向上と共に婚姻年齢が高くなること、そしてその他の事情にして變りがないならば、出産数は減退せねばならぬことを知つてゐる。が併し又我々は、最近十幾年(前世紀末の十年を謂ふ)の、特に躍進の人口動態の中には、その様な作用の片鱗をも認め難いことを明らかにした。何故かといつて婚姻關係はマルサスの見解から豫想せられるやうな動きを見せず、従つて出産数を減少させる様な作用を及ぼしてゐないからである。寧ろ之とは正反對に、婚姻数は増大し、婚姻年齢は若くなく、婚姻維持期間は延長してゐるのである。若し出産の動きに作用した因子がマルサスの考へた如く婚姻事情の變化だけであつたならば、最近十幾年は出産数の持續的増大を見ねばならなかつた筈である。而かも事實は周知の如くその正反對を示してゐるのである。

マルサスは福祉が婚姻に及ぼす影響についてののみ知つてゐるに過ぎないが、併し福祉と妊孕率の高さとの間には猶ほ遙かに直接的な關聯が存在することに氣附かなかつた。即ち福祉の増進と文化の向上とは直接に性衝動や増殖衝動に作用し得るものであることに注意しなかつたのである。

人口の大きい生存資料の大ききによつて制限されるといふマルサス説の第一命題は、症に自明の道理で、いつの時代にも妥當しよう。……生存資料の増大するところでは人口は不斷に増大するといふ第二命題も、「何らかの強力有效な障害によつて妨げられざる限り」といふ條件的副命題がついてゐる以上、之また否認し難い。

反之、其の第三命題は、今日に於いては最早適切でない。といふのは道徳的抑制や惡徳及び窮乏の外に、更に他の障害が發生してゐるからである。その一つは人間の生殖能力を侵害する所の生理學的障害であり、更には生殖作用を有意的に性衝動から分離する所の心理的障害である、そしてこの兩障害は、前者は積極的な、後者は豫防的な障害として、共に福祉の増進と共に生長するものである。従つて惡徳と窮乏の外に生殖作用の物理的不可可能性が出現し、道徳的抑制の外に第二の豫防的障害として生殖回避の意志が出現したことになる。

(Bevölkerungsbewegung in Deutschland 46)